

中村素堂

それでもわれわれは月をつい年を重ねて説文に魅せられて、唐本の説文関係の書籍を買い込み、また「水に従う包」は泡、「油に従う豚」カッパ、「水に従う酉」とゆくか——などと、駄洒落にならない書生ことばを弄っていた。

その内に説文会も書道会も何もあったものではない。日本大学の後藤朝太郎先生は、支那服を愛用していたばかりに憲兵隊に拉致されたなどと物騒な話題がふえてくる中で、敗戦の終局が迎えられる。その余程以前に自然、説文会などは百余年の歴史を閉じてしまひ、ついに復活をしない。

しかしこの軽く時かたされたように見えた説文学の種は、昭和二年には与謝野鉄幹・晶子夫妻、正宗敦夫氏等の『日本古典全集』によって、『狩谷校斎全集』は刊行せられ、翌三年にはその全集八巻に『説文檢字篇』が出たりして、チラチラと世間の好学の眼をひくようなこともあった。すぐかぶれやすい皮膚のような連中が集まつて京橋の商工倶楽部の一室を借りて「榴社」となづけて「説文」と「篆刻針度」のふたつを読む会を創め、これは会員全部による輪読ということになり、初めは随分多い人数であった。篆刻の本を研究に加えたので、新聞静邸、関野香雲のようなオーソリテイから平林北洞、森山雲海君のような若手も入会してきた。

これはなかなか調子がいいなと大いにやる気であったところ、その輪読の当番になると、どういふものか急に奥さんが病気になるたり、近所に不幸があつたりして欠席する例が多くなった。仕方がないので田辺齋盧先生が「篆刻針度」を、「説文」は私が代読して間に合わせるうちに、それがいつか定着してしまつて、以上二人でほとんど読むようになってしまつと家事近隣の取り込みも減少したのも不思議であつた。

この外にもうひとつ閉口したのは書道関係の学問ならこれ以上の先生はないといわれる河井筌盧先生が毎回定期にご出席になり、しかも会費ひとり金五十銭もきちんとお払い下さつて、弟子が読むのを聞いて下さる。下さるどころではない、時々ニヤッと微笑され、この微笑されたところはみな誤読した箇所である。先生の悪趣味には大閉口。せめてお住居が遠くであられれば、にわか雨でも降らしたいくらいなのに、京橋区(今の中央区)が会場、お住居は麴町区(今の千代田区)なのである。

たまに検査が行届いて少々うまい講義などして恰好いいつもりでいると、あれは何とか本にある説だが、その後清朝の何とかいう学者が別に研究をして近ごろはやはりない説になつてゐるなんていわれる。今ごろになつてこれが何より有り難い教育をいただいたことに気づいているが恥ずかしい話だ。

しかしこの席に例会の都度欠かさず出席し、前もつて下読みまでしてきて、すんだのちも会場から歩いて東京駅へ出る途々も必ずそれに続く質問をして倦むことを知らない青年学者がいた。話の続きもあるので、八重洲口にあつたチンマンという安い中華料理の二階で食事をしながら話し込んだこともあつた。実に頭の切れる好学の見本のような人柄に敬服していた。これは誰あろう、今、日本書道学者として天下に知られている伏見冲敬先生その人である。

十年くらい経つと思うが、芝の虎ノ門にあつた晩翠軒で伏見先生門下が先生の出版を祝する会をやつて私もおよばれを受けご馳走になつた時、今のこの話をして、あの倦むところを知らない人でなければこれだけの仕事はできない。よく急用が出来たり細君が急病にならないうようにして、学問のために急用を外すくらいに勢いでなければと話した。

これは事実で出来そうで出来ない立派なことなので門人の人々は敬慕の眼で一斉に先生を見ていた。何か私までいい事をしたかのようにうれしかった。